

「交流プログラム」における素材型教材作成の試み

長原明子

目次	0. はじめに
	1. センターにおける交流プログラムとは
	2. 交流プログラムの主な学習活動
	2 - 日本語面接
	2 - 交流会
	2 - 話題の授業
	3. 教材化の試み
	3 - 教材の必要性
	3 - 交流プログラムにおける教材の考え方
	3 - 教材群の枠組みと構成
	3 - 各教材の構成
	4. 問題点と今後の課題

0. はじめに

中国帰国者定着促進センター（以下、センター）では、指導理念として「日本での生活への自信と意欲、それを裏付ける基礎知識と基礎技能」を身につけることを大目標に掲げ、教育を行ってきた¹⁾。大人コースでは、

身近な生活行動場面に必要な基礎知識・技能（中目標1）

将来の生活に有用な基礎知識・技能（中目標2）

¹⁾ センターにおけるカリキュラムの「目標構造表」については、当センター紀要2号の佐藤・小林「カリキュラム開発および理念的目標の構造化について」を参照されたい。

身近な生活や将来の基礎となるコミュニケーション力（中目標3）を身につけるために、具体的な小プログラム群が設計された。それらの小プログラム群は、学習者・教師の双方にわかりやすいように「知識・行動・交流・ことば」の4つの大きなプログラム枠に従って再構成され、日々の授業が行われている。本稿では、そのうちの1つで、当センター紀要1～4号において報告を行ってきたボランティア参加型学習活動（以下、交流会）・日本語面接などを含む「交流」プログラムを取り上げる。

これまでセンターでは使用する教材を積極的に作成してきた。文字教材、聞き取り教材、日本の生活とことばシリーズ1-15（あいさつ、郵便局・商店、交通、電話、病気、仕事、面接などの15分冊）、文法練習帳、辞書引き教材やその他、出版されていないセンター内教材を含め「知識・行動・ことば」のプログラムに関する教材は必要に応じて作られてきた。しかし、「交流」プログラムに関するものだけがほとんど教材化されないままになっていた。それは「交流」プログラムの授業自体が、話題をめぐって実際にコミュニケーションをする中で語彙や表現を蓄積していくことが中心になるため、教材という形で配布された場合の弊害が容易に予想されたからだろう。

本稿では、まず「ことば」プログラムのような従来の構造的な学習と異なる「交流」プログラムの概要を紹介する。そして、センターの成人学習者のうち中国語の識字力に問題のないタイプの学習者をターゲットに、このプログラムを支える日々の授業で必要となるものという視点から行われた教材化の試みについて現在までの経過を報告する。

1. センターにおける交流プログラムとは

センターでは、学習期間である4ヶ月を終えるまでに、最終的に達成されるべき目標群を「目標構造表」として定めている。学習活動はそれらの目標に従って、計画・構成されていく。その一連の学習活動群（小プログラム）を「知識・行動・交流・ことば」プログラムの4つにまとめ分類している。「交流」プログラムは、「目標構造表」における以下の目標（抜粋）を達成するためのプログラム

である。

中目標3：身近な生活や将来の生活の基礎となるコミュニケーションの力を身に付ける	
小目標 (1) 話題コミ 日本人と接することを通して、コミュニケーションに対する柔軟な姿勢を築くとともに、身近な話題でコミュニケーションできる	達成目標 様々な手段を用いてコミュニケーションできることを意識し相手の発話が理解できないとき、自分の発話が伝わらないときの対処ができる 話題：自分に身近な話題でコミュニケーションできる 話題準備と継続、展開：時や場所、相手を考えて、前もって準備された話題や適切な表現を使って会話を継続させることができる
中目標2：将来の生活に有用な基礎知識・基礎技能を身に付ける	
小目標 (2) 異文化 異文化社会で適応に伴う問題、および日本での人間関係において生ずる問題を知り、自分の問題として対処法を考えてみる	達成目標 異文化事例等を通じて、文化の異同を把握し、その背景について考えてみる
小目標 (3) 日語自学 日本語の自学自習能力の基礎を身に付ける	達成目標 生活の中で日本語を学べることを意識する
中目標1：身近な生活行動場面の基礎知識・基礎技能を身に付ける	
小目標 (4) 住居・近隣対応 居住環境についての知識を身に付け、近隣の人や援助してくれる人と良好な関係を保つことができる	達成目標 日本の近所付き合いについて知り、近隣の人とよい関係を保てる 身元引受人や自立指導員の役割を知り、これらの人々とよい関係が保てる 接客・訪問の基本的なマナーを身に付ける

交流プログラムは中目標3小目標(1)の「話題コミ」(話題コミュニケーション)と中目標2小目標(3)の「日語自学」、中目標2小目標(2)の「異文化」を中核的な目標とするプログラムである。中目標1小目標(4)住居・近隣対応は行動達成の要素を含む目標であるが、近隣との交際自体がその都度周りの人々との交流を通して学ばれていくものであるという側面を重視し、交流プログラムに組み込まれた。交流プログラムの学習活動はすべてこれらの目標を念頭に置いて計画・実施されている。

2. 交流プログラムの主な学習活動

交流プログラムを特徴づけている主な学習活動は、日本語面接、交流会、話題の授業の3つである。ここではそれぞれについて紹介する。

2 - 日本語面接

開講1日目か2日目に日本語面接(初期)を行う。日本語面接の目的は、「自分なりの方法で日本人とコミュニケーションをはかり、日本でも何とかやっていけるという自信が持てるようになること」である。そのため、この面接では面接自体よりも面接後に行われるフィードバックに重点が置かれる。センターではコミュニケーション能力を「媒介とするものが言語・非言語にかかわらず、周囲の人々(日本人)と相互作用を行い、継続していく能力」と定義している。ことば以外にもコミュニケーションする手段があることに気づかせ、日本語力が充分でなくても、いろいろな手段を講じてコミュニケーションをはかろうという姿勢を作ることが、フィードバックを含めた日本語面接の目標となる。日本語面接によって、コミュニケーションとは学習したことばだけでなされるのではなく、非言語的要素(ジェスチャー・表情・対人技能など)を含むコミュニケーション・ストラテジーを用いてなされる相互作用の総体であるというセンターのコミュニケーション観を学習者に示し、これから始まる学習の方向付けを行うのである。

したがって、日本語学習歴のある人もない人も成人の学習者全員が対象となる。手順は、中国語（又は中国語のテープ）で動機付けを行い、同時に学習者にビデオ撮影の承諾を得る。時間は1人3分を目安とし、面接官と1対1で名前、年齢、趣味、来日月日などについてやりとりをする。内容は全クラス共通である。面接官の質問のコントロールは、ことばによるもの（第1段階）、ジェスチャー・小道具によるもの（第2段階）、筆記・絵などによるもの（第3段階）と段階を踏んで崩していけるよう統一してある。このときの崩し方をもとに、フィードバックでは「面接官がどのようにしたときに質問の内容がわかったのか」「質問の内容がわかったときどのようにして答えを伝えたのか（どのようにすれば答えが伝わったのか）」など具体的に場面を再現する。日本語が全く分からなくてもコミュニケーションできたものがあつたという実感を強化し、コミュニケーション・ストラテジーの有効性を意識化させる。

修了間近にも日本語面接を行う。修了時には、4ヶ月の学習成果を確認し、今後の学習継続に自信と意欲を持たせるため、コミュニケーション能力が伸びたという実感を強化することが目的となる。手順は初期と変わらないが、既習項目と未習項目の両方を含む質問内容はクラスによって違ってくる。フィードバックでは、聞き取りや発話の面での成果の確認に加え、学習していないことばや表現にぶつかったときの解決方法を問う。センター退所後の実生活でわからないことばに遭遇したとき、コミュニケーション・ストラテジーを使用するなどいろいろな工夫をして会話を続けていく姿勢が重要であることを強調する。^{*1}

2 - 交流会

交流会は1期のうちにほぼ3回行われる。期によって異なるが、初回が4ヶ月（約16週）の5週目、2回目が8週目、3回目は13週目ぐらいに実施される。地域の日本人に参加してもらって学習活動である。日本人参加者が教師の代行やアシ

^{*1} 日本語面接については、池上・井本(1993)、平城他(1993)に詳しい。

スタントとしてではなく地域の一日本人として学習者と交流し、双方がことばの障壁があっても何とかコミュニケーションをとろうとしていく過程を重視したプログラムであり、体験学習の1つとして位置づけられるものである。センターの教育目標のキーワードである「自信と意欲」は、実際にコミュニケーションがとれたという体験を通し「学習」や「伸び」を意識化することによって得られるものであるが、交流会はセンターの学習期間を、「体験化」^{*1}を開始し、より有効に「体験化」を促進させるものとするために行われる。

初回の交流会では初対面会話を中心にセンター案内やゲームなどが行われることが多い。初対面会話では1対1で写真や地図、筆談など様々な補助手段を用いながら、名前、年齢、家族の人数・構成、出身地、中国での仕事、故郷の気候・有名なものなど自分自身のことに関する話題を中心に日本人参加者とコミュニケーションを図る。学習者にはセンターの教師以外の日本人と接するのは初めてという者がほとんどだが、「思ったより通じ合えた」といった感想をもらす学習者が多い。交流会の次の日には授業としてフィードバックが行われ、前日の体験の整理を通して、コミュニケーション・ストラテジーと様々な補助手段の有用性が強化される。

2回目は日本語での交流の時間の他に、中国事情クイズや中国語・中国の歌などを日本人参加者に教える活動などが、3回目は通訳を介して交際や近所づきあい、接客方法などのテーマで、日中の違いを話し合う座談会やロールプレイを通しての交流が行われる。学習者がこれまでに中国で培ってきたこと、身につけてきたことを材料にして交流ができるということが、学習者に自信を与え、交流会

^{*1} 「体験化」とは、体験の中で起きたことを反すうし、自分の判断や実感の評価を通して仮説をたて、さらに次の体験につなげていくことで、体験を単なる体験ではなく学習に結びつけていくことであると考えている。安場他(1991)に詳しい。

を学習者自身の体験にするための鍵になる。⁴¹

以上、日本語面接は学習者に教師側のコミュニケーション（能力）観を表明し、学習者の学習に対する態度形成を促す役割を担うものであり、交流会はセンターでの日々の学習を体験化に導く機会の1つとしての役割を担っている。

2 - 話題の授業

交流プログラム中で行われる日々の話題の授業は、センターでは次のような役割を持つものとして捉えられている。

- ・教師とのコミュニケーションを実際に体験する場としての役割
- ・コミュニケーションを通して、語彙や表現を蓄積していく場としての役割
- ・コミュニケーションの最中、相手の質問内容が理解できないときや、自分の言いたいことが伝わらないとき、その事態を解決する能力を身につける場としての役割

授業には日本語面接のフィードバックのようなオリエンテーション的な性格を持つものもある。また、日々の授業でもコミュニケーション・ストラテジーを使うよう学習者に促したり、未習の語彙や表現で学習者が言い表したいことがわかったときには、それらの語彙や表現を導入したり提示したりすることも多く、教師

⁴¹ センターでは日本人参加者に対しても「日本語の力が充分でない人々とコミュニケーションをはかる方法を学び、異文化に対する理解を深めていく体験学習の機会」として交流会を捉えており、1996年からは「センター学習者とともに日本人参加者と教師が学び合う場」として、これまでより鮮明にその位置づけを打ち出している。交流会については、佐藤他(1993)、安場・馬場(1994)、安場・馬場(1995)、安場(1996)に詳しい。

が教師としての役割を担っていることには違いない。しかし、基本的には授業それ自体もまた異文化間コミュニケーションを体験できる場とすることが、話題の授業の中心的な役割である。

話題の授業は中国語を解さない教師が担当することが多い。ある話題を中心にコミュニケーションを図っても、そのときどきの学習者の反応により様々な話題に展開する。それゆえ、教師・学習者双方とも伝えたいことが、これまでに学習した語彙や表現で伝えられるようなものではないことが多い。教師も学習者もジェスチャーや絵、漢字を書くなど、いろいろな手段を用いて質問に答えたり、説明をしたりしなければならない。

ここで話題の授業が実際はどのように行われているのかを概観したい。「有名なもの」（後述、ブックレット - 2 - にあたる）という話題を例に、担任が授業担当教師に依頼する内容の典型と、授業の一部を簡単に文字化したものを見る。これは、学習を初めて実質4、5週間目に学習する。平仮名は50音を終え、特殊音に入ったばかりの頃である。センター全体の学習は、初期には電車・バス・商店・レストランの利用など行動面の学習も多いため、ことばの面はそれほど進んでいない。従って、交流の授業でも、学習者が自ら繰り出せる日本語は少なく、中国語が飛び交うことになるが、それでも、ジェスチャーや筆談、地図、写真などでコミュニケーションは成立する。

依頼例（メモ）：交流 / 話コミ「有名なもの」 - - - - -

T：教師、S：学習者

1. 復習
Sの故郷についてQ & A Q：～さん、中国のどこから来ましたか
A：～省～市（です）
2. 有名なもの
導入：Tの故郷の有名なものを紹介する
 - 1 「有名」は書けば、すぐに学習者にはわかるが、Sの方から「～何ですか」「書いてください」などを使っての要請を待って板書したい。
 - 2 地図や写真等を利用Sの故郷の有名なものについてQ & A Q：～市は、何が有名ですか（初出）
A：～
 - 3 学習者は、ここでほとんどが中国語でTの質問に答えようとするだろうが、Tからも「わかりません」「書いてください」などのコミュニケーション・ストラテジーを

繰り出し、学習者の回答を理解する。絵を描いたり、雑誌の写真などを利用して答えを確認することもできる。

Sの答えについてQ&A。

食べ物：どんなものか、大きさ、値段、他の地域のものとの違い、食べ方等

産業：どんな産業、生産量、どのくらいの人が働いているか等

観光地・遺跡・史跡：どんな所か、どの時代のものか、由来等

3に同じ。

4 Tの質問がわからないときには、具体的に大きさや規模、人数などを数字で表したりして質問の意図を理解させる。

3. まとめ

使用した語彙・表現を板書して整理する

担任の授業依頼のメモは、キーになる表現と故郷の有名なものについて話をする時のヒントが羅列してあるだけの簡単なものである。これは、この授業が、コミュニケーション・ストラテジーを使いながら学生の反応にあわせていろいろと話をすることが学習活動であるという担任・授業担当教師の共通理解のうえに成り立つことである。

授業の文字化（一部）

*「有名なもの」1コマ（1時限）の授業のうち、これまでにすでに次の活動はなされている - Tの故郷と有名なものの紹介 / Sそれぞれの出身地についてのQ&A / Sによる中国の地図の板書 / Sの出身地の1つであるハルビンの有名なものについてのQ&A

T：はい、わかりました。ハルピンは太陽島が有名なのね。じゃ、長春市は何が有名なの。

S1：（中国語で答える = 以下、中国語）

T：は？

S1 + 他のS：（中国語）

T：は？

S全員：（中国語）

T：わからない。

S1：バス。（前に出て、黒板に中国語で板書する）

T：（板書を見て）何ですか、これ。

S1：バス。

T：バス？ あー。（Sの板書に近寄り、指さして）これ、バス？

S全員：あー、あー。（=肯定している）

T：バスを何？

S1：（中国語）

T：バス、（ジェスチャー付きで）作るの？

S2～3人：（中国語）

T：これは、もしかしたら作るという意味？

S2～3人：（中国語）

T：（他の部分の中国語を指さして）これは何ですか。

他のS：（前に出てきて、教師が指さしている中国語の単語を他のものに置き換える）

T：あー、これですね。（といいながら、板書）「工場」（ここで日本語の漢字、発音を提示）

他のS：（今板書をした他のSが）あー、あー。（=肯定）

T：あー、（黒板に書いてある中国の地図の長春の位置、バスを示す中国語、Tが提示した工場という日本語を順に指しながら）長春にはバスを作る工場があるのね。大きい工場？ 大きい？

S全員：（反応なし）

T：（ジェスチャー付きで）大きい？

S1：（Tの質問の意味が分かり）そうです。（また前に出てきて、板書）「7万人」

T：えっ、7万人？

S1：はい。

T：ここで、7万人、仕事？

S1：はい、（中国語で）7万人。

T：（長春市、バス、工場、7万人などの板書を順に指さしながら）長春市はバスの工場があって、大きい。で、7万人仕事してるのね。はい、わかりました。

（以上、約2分）

このような日々の授業の積み重ねによって、結果的に、学習者はコミュニケーションを通して、日本語や日本文化に関する知識（例えば、年中行事や冠婚葬祭などの話題にのぼる情報）が得られるのだという実感を味わい、学習に対する構え（「学習とは教科書を使ってするものである」といったようなビリーフなど）を体験的にくずしていくことができるのだと考える。その感覚は、退所後も生活を通して学習が可能であるという肯定的な見通しを形成するうえで不可欠なものと考えている。

3. 教材化の試み

3 - 教材の必要性

これまで、話題の授業で使用する教具はいろいろと揃えられたが、教材はほとんど作られてこなかった。授業自体が実際にコミュニケーションをする場であるので、それで授業の目的はほぼ達成されていたからである。しかし、学習者は、交流プログラムの授業において、文法学習の時に感じるような「学習している」

という意識を持つことが難しい。加えて教師は、授業中学習者が教師とのやりとりに集中できるよう心がけるため、やりとりの最中に語彙をノートに書き写したりすることをあまり奨励しない⁴¹。いわゆる「お勉強」らしくない方法を採用しているため、コミュニケーションがとれたという達成感を得られても、1時間の授業が終われば、学習した項目は何だったのかとってしまう学習者がいても仕方ない。

学習者が1つ1つの授業について常に達成目標を意識しておくことはとても難しいことであるし、また、意識しやすい目標とそうでないものがある。これまでの交流プログラムは、形として残らない部分が多すぎるといえる。そこで、日本語面接や交流会の時だけでなく、交流プログラムの達成目標をきちんと日々の授業でも学習者に強化し、学習する内容を形として残していこうという意図のもとに教材化をまとめていくことになった。教材化することによって、語彙や表現だけでなく、交流プログラムで身に付けてほしいコミュニケーションに対する態度やスキルを書かれたものとして学習者に示していくことができる。また、学習者もその時間に何を学習したのか、ことばの面と態度やコミュニケーション・ストラテジーの面の両方をかえりみることができ、交流プログラムを学習する意義を認識しやすいのではないかと考える。

3 - 交流プログラムにおける教材の考え方

これまで交流プログラムで使用される教材がまとまりのある形にならなかったのは、先にも挙げた通り、教材という配布物がなくても授業自体の目標が達成されていたことが大きな要因である。配布物を使うと学習者が教材に集中してしまい、コミュニケーションをする態勢がとれなくなり、かえって授業の目標が達成

⁴¹ 但し、授業終了時にまとめとして使用した語彙や表現を整理し、メモを促したりすることはある。

できなくなるという危惧があったことは否めない。教材を作成しても、その教材が作成意図のもとに使われなければ、プログラムの目標と学習活動が合致しないものになってしまう結果になる。そこで、教材化にあたっては、教材に対する考え方を以下の3点にまとめ明確にした。

- 1)教材は基本的には学習者が予習や復習に使うものであること
- 2)内容は基本的にはコミュニケーションの素材・材料であって、モデルではないこと
- 3)交流プログラムの目標を学習者が意識化できるものであること

- 1)教材は基本的には学習者が予習や復習に使うものであること

特に交流プログラムでは、授業は教師とのコミュニケーションを実際に体験する場として捉えられている。教材を授業で使用するものの弊害を考えても、授業では関連するコミュニケーション・ストラテジーや ヒント（後述）の確認にとどめておくことが教材使用の前提条件になる。ブックレット形式（後述）で前もって渡すことができれば、学習者は交流プログラムで何を学習するのかある程度見通すことが可能になる⁴¹。また、予習ができる学習者は、事前に頭を耕したうえで授業に参加できるようになる。ある話題について、どんなやりとりが可能か想定できることは実際の会話を継続させるための能力の1つだが、予習はその訓練にもなると考える。

- 2)内容は基本的にはコミュニケーションの素材・材料であって、モデルではないこと

授業が実際にコミュニケーションを行う場であれば、（たとえ授業では使わないとしても）教材はそのコミュニケーションに役立つものでなければならない。1つの話題について、使える素材がそこに準備されていることが理想的である。

⁴¹ 現在はまだ試作段階なので、学習者にはブックレット形式で渡しておらず、授業後復習用に配布している。

素材には、語彙や表現などの言語的なものと、地図や写真、絵といった視覚的なものの2つが考えられるが、ここではその両方を指している。また、学習者個人に関わる素材をまとめて記録しておけるスペースも、その話題を自分に引き寄せて学習していくのに役立つ。例えば、自分の故郷について有名なものを挙げておく欄の内容は、中国全般や他の地域の有名なものとは異なるはずで、実際に学習者がコミュニケーションをするときの素材とすることができる。

3) 交流プログラムの目標を学習者が認識できるものであること

1つの話題であっても、いろいろなアプローチでの学習が可能である。でてくる表現を文型として分析・整理することもできるし、その話題で作文を書くこともできる。もし教材が、語彙や表現を並べただけのものであったら、その教材をいろいろな形で学習することができるだろう。しかし、1つのプログラムの教材としては、そのような汎用性は達成目標をぼやけさせてしまう。学習者が達成目標を意識しにくい。交流プログラムの授業が、コミュニケーションを通して語彙や表現を蓄積していく場であり、コミュニケーションの最中、相手の質問内容が理解できないときや、自分の言いたいことが伝わらないときに、その事態を解決する能力を身につける場であるなら、その教材も達成目標を明確に示す部分がある方が、学習者も学習の焦点を絞りやすいはずである。試作版の教材では 動機付け と ヒント に当たる部分(後述)がこの達成目標を示す部分となっている。

3 - 教材群の枠組みと構成

教材の全体構成として次のような枠組みを考えた。

--- ブックレット ---
 0. 話してみよう
 1. 私のこと
 2. 話題
 * 付録

--- ブックレット ---
 1. 私のこと
 2. 話題
 3. 事情
 * 付録

--- ブックレット ---
 1. 私のこと
 2. 話題
 3. 事情
 * 付録

ブックレット ・ ・ それぞれが、1つのユニットとなっていて、センターでの学習期間の初期・中期・後期に対応する。ユニットはそれぞれ内容で分類した3つのモジュール型教材¹⁾群と付録から構成される。

現在までに、以下のような構成案が考えられている。

ブックレット	ブックレット	ブックレット
<u>0. 話してみよう</u> いろいろな挨拶 A. 一日の挨拶 B. 初対面の挨拶 物の用途を尋ねる 物を借りる 日本語を 話すとき聞くととき	<u>1. 私のこと</u> 趣味・嗜好A 趣味・嗜好B <u>2. 話題</u> 年中行事 料理 結婚式	<u>1. 私のこと</u> いろいろ話そう・ いろいろ聞こう <u>2. 話題</u> 経験 日本の歌・中国の歌
<u>1. 私のこと</u> 名前・年齢・家族 中国の家族 来日月日・出身地 中国から日本まで 生年月日・誕生日 中国での仕事 私のこと まとめ(1)	<u>3. 事情</u> 訪問 客を迎える * 付録	<u>3. 事情</u> 町内会と回覧板 いろいろな訪問者 近隣の人々 引っ越し事情比較 引っ越しの挨拶 招待・訪問の約束 退所時の挨拶 * 付録
<u>2. 話題</u> 気候 有名なもの * 付録		

1つの教材が、1時間の授業に対応しているわけではない。また、日本語面接、交流会に関連する部分は教材化していない。

ユニット内の教材は基本的には学習順序を問わないが、初期に使用するブックレットにはオリエンテーション的に学習できる教材やまとめとして使用できる

¹⁾モジュール型教材とは、基本単位となる複数の教材が集められたのもで、使用者の目的やレベルによって使用者が教材の学習順序を決められる教材群を指す。

教材が含まれている。また、表を見てもわかるように、ブックレット だけが、他のブックレットと構成が異なる。ブックレット の「0．話してみよう」は、簡単な挨拶とコミュニケーション・ストラテジーを意識化する教材から成っており、他の1・2・3を学習していく上での土台となるものとして0と位置づけた。「1．私のこと」では自分に関するごく身近なことを、「2．話題」では日中の比較ができるいろいろな話題を取り上げる。「3．事情」は行動場面に相当する内容を取り上げることとした。

3 - 各教材の構成

これまでにブックレット を試作し、試用中である。各教材ごとの構成を簡単にまとめておく。

それぞれの教材は、動機付け ことばと表現 練習 ヒント によって構成されている。基本的には中国語に日本語訳がつく形（ことばと表現 のみ、日本語に中国語訳がつく形）で学習者が1人でも予習・復習ができるようになっている。動機付け では、ここでは何を話題にするのか、なぜそんな話題で話すのか（「1．私のこと」「2．話題」に関して）、なぜその学習活動をするのか（「0．話してみよう」「3．事情」に関して）等方向付けを行う。ことばと表現 では、最低限のキーワードやキーになる表現を提示してある。但し、どんなに簡単なやりとりであってもモデル会話のような形で「いい見本」を提示することは避けた。モデル会話を提示されることで、学習者は言外に日本語による流暢な発話や正確さが求められていると読みとることもなり、そうなると学習者にとっての達成目標が教師の意図とくいちがってしまうからである。練習 は、実際に授業でする活動と同じような活動が中心で、自分で聞いたり話したりすることを求められる形式が多い。ヒント には、「0．話してみよう」で提示するコミュニケーション・ストラテジーが各教材に繰り返しちりばめられる。コミュニケーション・ストラテジーの他にもその内容に関連するポイントがヒントとして扱われる。例えば、「とっさに挨拶の日本語がでないときは笑顔で会釈することで十分だ」といった内容や会話の拡げ方、接客・訪問のマナーなどコミュニケーションに関する様々な知識が取り上げられる。

4. 問題点と今後の課題

制作・試用過程において見えてきた問題点を今後の課題としてまとめておく。

まず教師用マニュアルの必要性が挙げられる。教材の基本的な考え方や使い方を明確にしておかなければ、せっかく作成した教材もうまく活かされない場合がある。また、基本的な考え方や使い方を教師間で共有することは、プログラムの目標や授業・教材のあり方などを捉え直す機会にもなり、教材だけでなく、プログラム全体へのフィードバックが期待できる。教材制作と並行して進めたい。

それから教材全体の枠組み・構成について検討を継続する必要がある。現段階では教材全体の枠組みや構成についてのフィードバックがほとんど蓄積されていないのが実状であるが、教師間で多様な考え方が存在するであろうし、フィードバックを得ながら検討を続けていきたい。

最後に将来的な課題として索引の制作を挙げる。自己学習において学習者に教材を活用してもらうために索引は不可欠である。語彙の索引、表現の索引、中国語から引けるもの、日本語から引けるものなど、簡便な索引をどのような形で実現できるか、いくつか案を考えていきたいと思う。

《引用・参考文献》

- ・飯田恵己子、八田直美(1992)「海外向け日本語モジュール教材『ようこそ』の制作について」『日本語国際センター紀要』2号、国際交流基金 日本語国際センター
- ・池上摩希子、井本美穂(1993)「面接場面におけるコミュニケーション能力の評価に向けて」『中国帰国孤児定着促進センター紀要』1号、中国帰国孤児定着促進センター
- ・大橋純(1995)「Communication Strategies: Are They Worth Teaching? (コミュニケーション・ストラテジー：教授の利点)」『世界の日本語教育』5、国際交流基金 日本語国際センター

- ・佐藤恵美子、馬場尚子、安場淳(1993)「実践報告：ボランティア参加型学習活動」『中国帰国孤児定着促進センター紀要』1号、中国帰国孤児定着促進センター
- ・佐藤恵美子、小林悦夫(1994)「カリキュラム開発および理念的目標の構造化について」『中国帰国孤児定着促進センター紀要』2号、中国帰国孤児定着促進センター
- ・田中望(1991)「教材のデザイン - モジュラー型教材・リソース型教材」第1回日本語教育セミナー『新しい教材と言語教育理論』（講演・研究発表要旨）、国際交流基金 日本語国際センター
- ・トムソン木下千尋(1994)「初級日本語教科書と『聞き返し』のストラテジー」『世界の日本語教育』4、国際交流基金 日本語国際センター
- ・西口光一(1998)「自己表現中心の入門日本語教育」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』2号、大阪大学留学生センター
- ・平城真規子、山口政之、小林悦夫(1993)「コミュニケーション能力養成のための指導活動の試み - 日本語教育面接のフィードバック - 」『中国帰国孤児定着促進センター紀要』1号、中国帰国孤児定着促進センター
- ・安場淳、池上摩希子、佐藤恵美子(1991)「異文化適応教育と日本語教育1 体験学習法の試み」凡人社
- ・安場淳、馬場尚子(1994)「日本人ボランティアと学習者との交流活動プログラム活性化のための事例研究 - ボランティアの視点から - 」『中国帰国孤児定着促進センター紀要』2号、中国帰国孤児定着促進センター
- ・安場淳、馬場尚子(1995)「学習者 - 日本人ボランティア交流活動プログラムにおける学習者評価の可能性」『中国帰国者定着促進センター紀要』3号、中国帰国者定着促進センター
- ・安場淳(1996)「『学習者と地域住民との交流実習』の相互学習プログラム化のための中間報告」『中国帰国者定着促進センター紀要』4号、中国帰国者定着促進センター

